【論文要旨】

1.　問題意識と課題、先行研究

本論文は、中国の新たな文学史あるいはSF（Science Fiction）史の構築にむけて、主に1930年代の科学小説および科学小品文について論じたものである。

20世紀に科学ロマンス（Scientific romance）を母体に生まれた小説ジャンル、サイエンス・フィクション（Science fiction）の発展は、科学と技術の発展と切り離せない。18世紀後半に起こった産業革命は、19世紀から20世紀初頭にかけて、人々の生活を一変させ、科学技術による変化のスピードを人々に見せつけた。また、進化と種の起源に関する理論に触発されて生じた発展的な歴史観は、マルクスの唯物史観のような、「社会が発展する」という意識を生み出し、一般大衆の意識にも影響を及ぼした。19世紀は、伝統的な価値観がかつてないほど揺り動かされた時代である。伝統的な知恵の中に開いた大きな裂け目に様々な思索が流れ込んだ。文学では、いまの時代における、いまの世界を描き出し、同時代の体験の真実を記録する一手段として写実小説が発展した一方で、新しい科学思想と科学技術によって開かれた空想的な可能性を題材にした「いま、ここ」にとらわれない作品群が現れた。

それらの作品には、あらゆる情報が光速で流れる電子工学の時代に至って、マクルーハンが「メディアはメッセージである」と明確に示したように、メディア――新しい技術――われわれ自身の拡張したもの――の「内容」（すなわち、実際には別のメディアなるもの）よりもむしろ、メディアそれ自体が重大な意味をもち、いかなる技術も徐々に完全に新しい人間環境を生み出すという「メディア論」的視点による、様々な夢と悪夢、あるいはユートピアとディストピアが描かれた。フランスでは主にAnticipation（未来予想）、英語圏では主にScientific romance、あるいはScientific novelと呼ばれたこれらの小説群は、やがてヒューゴー・ガーンズバックが*Amazing Stories*誌を創刊し、ヴェルヌやウェルズなどの科学的なromanceやnovelを典型としてScience fictionを打ち出すと、一つのジャンルに発展した。

中国では、清末に、明治期の日本の小説を参考にしつつ、小説を社会改良の手段に用いた梁啓超らによって科学小説というジャンルが受容された。日本で科学小説という呼称が現れた最初の例とされているのは、尾崎行雄が末広鉄腸『政治小説　雪中梅　下編』に寄せた序文における「科学小説（サイエンチヒツクナーブエル）」という記述である。梁啓超が、直接、尾崎による記述を目にしたかは定かでないが、いずれにしても、scientific novelの訳語としての科学小説という呼称を受容したわけである。清末からのこの呼称は、ガーンズバックの*Amazing Stories*創刊以降のScience fictionに対しても使われた。その後、ソ連の文芸を受容して、научно-фантастический роман（ナウシノ ファンタスチーシェスキー ロマン）を直訳した科学幻想小説という呼称が現れ、文革収束後に再び流入したScience fictionにも、空想性や虚構性を意識した科学幻想小説という呼称を用いて、それが定着するまで、以前からの科学小説という呼称も混在していた。現在は一般に科幻と略されて、小説だけでなく、映画がアニメ、マンガなど、様々なメディアに対応している。

Science fiction（以下SF）は、欧米（特に米国）においては、主に安っぽいパルプ・マガジンに発表され、低俗でくだらない大衆小説と揶揄されながらも、後に名作と称される数々の作品を生み出してきた。SFの多くは、現在の説に疑問を抱き、仮説をたてて検証するといった科学的思考方法を模しており、仮想的な世界を描くことで認識変革の衝撃、すなわちセンス・オブ・ワンダー（sense of wonder）を読者にもたらす。センス・オブ・ワンダーの面白さは、SFに求められる主要な要素（効果）といえるが、中国のSFに関する論評において、センス・オブ・ワンダーという言葉は、2010年前後から徐々に散見されるようになるまで、ほぼ見かけなかった。

その理由として、中国においては、SFがセンス・オブ・ワンダー、つまり読者側の感覚を意識した娯楽性の創出にはそれほど注意が払われなかった点が考えられる。

中国において、SF 作品は導入された当初から、娯楽作品とするよりも、大衆を教育するための手段として受容された。例えば梁啓超は、1902 年、小説雑誌『新小説』を創刊した際に、小説によって哲学や科学を詳しく述べるものとして「哲理科学小説」を提唱しており、同誌に科学小説の角書きでヴェルヌの「海底旅行」を連載した。清末の SF に関する林健群の研究によれば、当時の中国の SF の書き手たちは「科学による救国のアピール」、「民族意識の覚醒」、「政治改革の寄託」、「女権思想の提唱」、「迷信、野蛮な風俗批判」などを行っていた。教育の意図は、五四期、そして新中国に至るまで受け継がれ、SF 作品の表現に制限を課することとなった。書き手は、でたらめと取られかねない空想の世界を展開する SF よりも、科学普及読物をより多く書いた。時代を下るにつれ、政治的な配慮からも、自由な発想による SF は書きにくくなっていった。中国の SF は、文革収束後、にわかに息を吹き返したが、1983 年の精神汚染キャンペーンにより再び停滞した。中国の SF が本格的な発展を見せ始めたのは 1990 年代以降である。

清末以降から現代にかけての中国の SF に関する研究はすでにあり、葉永烈（1981）、武田雅哉・林久之（2001）、呉岩氏主編（2008）、王泉根主編（2011）などが、作家や作品、SF にまつわる出来事を数多く伝えるとともに、中国の SF 史の流れを提示している。しかし、これらは概説書、あるいは評論集としての性質上、断片的な言及にとどまる。また、清末文学研究の一部に、王徳威（1997）や林健群（1998）の論考など、SF 作品の詳細な分析を行った論考がある。文革収束後に関しても、陳潔（2006）をはじめ、主要 SF 作家の研究が進みつつあるが、民国期（中華人民共和国の建国前）や新中国成立直後については整った研究が見られない。

民国期や新中国成立直後の SF 研究が進まなかった原因として、この時期は、SF よりもむしろ科学普及読物が多く書かれたことが考えられる。中国においては、今日でも SF 作家の多くが科学普及協会に所属しており、中国最大の SF 専門誌『科幻世界』も、科学技術協会の傘下にあることが示すように、SF と科学普及読物はコインの表と裏のように一体のものである。そこで、本論文では、SF がかつて「科学文芸」という総称で理解されたことに示唆を得て、SF 文学だけでなく、科学普及読物も視野に入れ、1930 年代の科学小説と科学小

品文を対象とすることで、これまで研究が進まなかった民国期のこの方面の文学について研究を進めた。

2. 論文の構成

序章
1. 問題提起
2. 論文構成

第 1 章 科学小品文試論 —— 顧均正を中心に
0. 序
1. 編集者顧均正
2.『中学生』編集と科学普及読物への関心——科学小品文創作の試み
3. 科学小品文理論と顧均正
4. 夏丏尊、劉薫宇共編『文章作法』
5. 科学小品文における日常性
6. 結論

第 2 章 顧均正における米国 SF の受容——『在北極底下』を中心に
0. 序
1. 科学小説集『在北極底下』序文より
1. 1. H・G・ウェルズの作品への興味
1. 2. SF 観におけるガーンズバックとの共通点と相違
2.『在北極底下』と原作の発表状況
3. 各編分析
3. 1.「和平的夢」
3. 2.「倫敦奇疫」
3. 3.「在北極底下」
4. 結論

第 3 章 近代中国における性の科学と SF——顧均正「性変」を中心に
0. 序
1. 顧均正と開明書店、『科学趣味』誌創刊と「性変」
2.「性変」梗概および語りや描写の特長
3.「性変」における性転換——西洋科学と中国色
4. 伝播される性転換、意識される性別
5. 結論

第 4 章 科学普及読物作家 高士其の誕生
0. 序
1. 高士其略歴——「科学救国」の夢と挫折、そして再起
2.「菌児自伝」以前の科学小品文
2. 1.『読書生活』掲載の十二編
2. 2. 一～六作目——通俗的、平易な表現
2. 3. 七～九作目——日常生活の描写
2. 4. 十～十二作目——批判と抒情を前面へ
3. 小説／科学詩創作の萌芽——「鼠疫来了」
4.「菌児自伝」分析
4. 1. 科学小説としての「菌児自伝」
4. 2. 細菌の視点
4. 3. 詩的表現

5．結論
第 5 章 『科学世界』に掲載された「科学小説」
0．序
1．中華自然科学社と『科学世界』
1．1．中華自然科学社
1．2.『科学世界』――「科学小説」掲載の頃
2.「科学小説」掲載状況および作品紹介
3.「夢」へのアプローチ――筱竹と李秀峯
3．1．筱竹「冰屍冷夢記」
3．2．筱竹「橡林歴険記」
3．3．李秀峯「防空演習」
4．結論
終章
1．青少年教育と科学小品文
2．ウェルズからヴェルヌへ（米国 SF 誌の批判的受容）
3．さまざまな「科学小説」
4．課題と展望
参考文献
付録 顧均正「性転換」日本語訳

3. 論文の概要

第 1 章から第 3 章にかけては、主だった中国 SF 史において、早期ないしは民国期の SF 作家として必ず言及される顧均正を論じたものである。

第 1 章「科学小品文試論――顧均正を中心に」では顧均正の経歴について整理し、顧均正と科学普及読物、とくに『太白』誌において誕生した「科学小品文」との関わりについて考察した。顧均正は開明書店での『中学生』誌編集の過程で科学普及読物への関心を深めていき、職場だった商務印書館や開明書店、およびそこに集った教育者や文学者らの影響をうけた。白馬湖派の夏丏尊、劉薫宇による『文章作法』は、良い小品文の条件として実生活を描写するよう求め、小品文のサブジャンルである科学小品文についても例外ではなく、「生活を経る」という要求があった。顧均正が執筆した科学小品文は物理学や化学に関する内容が多く、その科学知識を日常生活に結びつけにくかったためか、彼は当初、「生活を経る」こと（実際には社会感を経ること）に強い反感を持っていた。しかし彼は、科学小品文の創作において、生活に引きつける努力を行った。そして 1950 年代には、「科学小品は必ず生活を経ねばならない」という見解を示すに至った。第 1 章では、その葛藤の経過を明らかにした。

第 2 章「顧均正における米国 SF の受容――『在北極底下』を中心に」では、顧均正の科学小説集『在北極底下』について論じた。中国において顧均正の作品は中国早期 SF 文学における「ハード SF」、「技術面細部重視」派の最高峰と位置づけられ、高い評価を得てきたが、『在北極底下』所収の作品「和平的夢」「倫敦奇疫」「在北極底下」には、いずれも原作があることを明らかにし、また、英文原作と顧均正作品の比較分析を通して、顧均正にお

ける米国パルプ・マガジン SF の受容状況や SF 観を示し、『在北極底下』の意義を論じた。考察を進める手がかりとして、『在北極底下』序文からうかがわれる三つの点――①顧均正がハーバート・ジョージ・ウェルズの作品に興味を持っていたこと、②米国の SF 専門のパルプ・マガジンを読んでいたこと、③科学普及の意図を持っていたこと――に着目した。②については、顧均正が閲読したとする、当時の SF パルプ・マガジンの内容の傾向を整理し、提示した。顧均正は米国の SF 雑誌に掲載された作品について、「空想的な要素があまりにも多く、科学的要素があまりにも少ないと感じ」、「科学的な要素を少し加えて、科学普及教育の一助」とする SF を打ち出した。『在北極底下』所収の三編は、いずれも当時の目新しい科学や技術を題材にして空想を展開した作品である。「和平的夢」は、1930 年代に中国でも上海を中心に普及したラジオを題材にしており、ラジオ催眠術を空想している。「倫敦奇疫」は、ロンドンのスモッグに着想を得、触媒の散布という化学兵器を空想している。「在北極底下」は、北磁極にまつわる仮説に基づいて、人工北磁極の開発を空想している。これらは、ウェルズのような豊かな想像と科学的思考の特徴を備えていた。また、いずれの作品にも、原作にはない科学知識の説明や注釈が多く見られた。こうした事実から、SF を科学普及に役立てるという点においては、顧均正の SF 観は、米国で世界初の SF 専門誌を創刊したガーンズバックのそれと共通していたが、創作上の方針は、教育臭を漂わせないことを重視したガーンズバックとは異なっていたことを指摘した。さらに、『在北極底下』所収の作品は、米国のパルプ・マガジン SF の、アクションシーン、恋愛、正義のヒーローなどの娯楽的要素が顕著に現れており、科学性や空想性のみならず、娯楽性にも富んだ良質の SF 作品をいちはやく選定し翻訳したことは、顧均正の功績といえることを指摘した。

第 3 章「近代中国における性の科学と SF――顧均正「性変」を中心に」では、顧均正の科学小説「性変」について論じた。「性変」は、科学による性転換操作が描かれた作品である。先行研究では、外挿に優れている点や、政治から離れた視点、「中国色」を模索したことが評価されてきた。それらをふまえて、作品成立の背景や当時の中国の「性」をめぐる言説を視野に入れて考察を進めることで、近代中国における「性変」の意義をより明確にした。まず、「性変」成立の遠因として、開明書店と顧均正との関わりについて整理した。開明書店を興した章錫琛は、商務印書館で『婦女雑誌』の編集長を務めていた。章が編集長を務めた頃の同誌の特徴は、「男女の性的係わりを科学的に理解する中に女性問題の解決の糸口を見いだそうとしたこと」の新しさであったが、「新性道徳専号」発行後、章は北京大学の陳大斉の批判をうけて論争を引き起こし、商務印書館を解雇された。この時、顧均正は章錫琛を擁護する立場を取り、章が新たに創刊した『新女性』では、世界の婚姻風俗を博物学的に紹介し、ニューヨーク公衆衛生局の報告書を翻訳したりした。「性変」作品分析では、ストーリー展開や語り、描写の分析を通して、欧米の探偵・ホラー・SF 小説との共通点を示したうえで、「性」をめぐる中洋の言説がどのように取り込まれたかを分析・考察した。以上の分析・考察を経て、人間を生物学的にとらえる感覚を章錫琛らと共有し、

女性の身体や性差を人々が意識するようになった 1930 年代を経験した顧均正は、科学による人間の生命操作を夢見る近代中国知識人の一人として、日進月歩の性科学を外挿し、性の転換を空想した、と結論づけた。

第 4 章「科学普及読物作家 高士其の誕生」では、著名な科学普及読物作家として知られる高士其が文壇にデビューした経歴を整理し、後続の科学普及読物・SF 作家である葉永烈に影響を与えた 1930 年代の科学小品文および「菌児自伝」について論じた。高士其は「科学救国」の志をもって米国に留学したが、留学中に脳炎を患い、その後遺症のため、帰国後は防疫事業の実践者としてではなく、科学普及読物作家としての道を模索した。その過程で、社会活動家の李公樸、平民教育を推進した陶行知、マルクス主義哲学者である艾思奇と交流を通して、科学・思想・文学の三つの要素を融合させる術を得た。高士其の 1930 年代の科学小品文は、当初から、ユーモラスな表現を交えた生き生きとした文体や、病原菌を擬人化する手法によって、味気ない科学知識を面白いお話に変えてわかりやすく伝えた点、現実の社会政治に関連付け、中国人の民族意識や正義感を呼び起こす感化力が評価されてきた。しかし、高士其の作品に対する総括的な評価が定まっている一方で、彼の代表作とされる「菌児自伝」に至る、1930 年代の創作の道程を考察する研究は見られなかったため、「菌児自伝」とそれ以前の科学小品文との相違を、より明確に示す分析・考察を行なった。比較、分析にあたり、一般的に科学小品文と見なされてきた「菌児自伝」を、高士其自身が「科学小説」に位置付けていた点に着目し、「小説」としての創意や、一人称語りによる効果、特徴について考察した。また、初出が開明書店の『中学生』誌だったことから、当時の教育界の流れや科学大衆化運動との結びつきについても論じた。さらに、高士其が 1940 年代頃から多くの科学詩を書いたことにも着目し、「菌児自伝」にすでに見られる詩的表現について考察し、形象化された細菌の声と作者自身の声とが重なるような、希望に満ちた力強い詩の言葉によって、「菌児自伝」が高士其の代表作になったことを説いた。

第 5 章「『科学世界』に掲載された「科学小説」」では、1936 年前後、中華自然科学社が発行した『科学世界』に科学小説として掲載された作品について論じた。中華自然科学社とはどのような組織だったのか、『科学世界』はどのような雑誌だったのかを整理し、同誌に掲載された多様な科学小説の内容や特徴を整理することで、1930 年代の中国における雑然とした科学小説観、あるいは SF 観を示した。

1920 年代末に結成された中華自然科学社は、科学研究と大衆への科学知識普及の活性化を目標に掲げ、科学研究者や科学教育者らの職場と地域を超えた横のつながりを図り、「近年、全国に科学運動の空気が満ちてきた」なか、早くから科学運動の流れを切り開いたという自負のもと活動を行った。その一環として刊行された『科学世界』は、専門的な科学論文や科学教授法、科学技術の新事物や関連書を掲載・紹介し、読者の科学的疑問に答えるコーナーを設置していたため、社員の情報発信の場、あるいは情報源として機能し、社員を結ぶ重要な役割を担っていたものと考えられる。特に、高行健が総編集長の任に就いた期間は誌面改革が目覚ましく、科学小説コーナーが設けられて、九作品が発表された。

高行健は同コーナーにおいて筱竹のペンネームを用い、掲載作品の三分の二に上る六作品を発表した。『科学世界』に掲載された科学小説は、鄧啓東の科学小品文風の「冬の白衣の使者（冬天的白衣使者）」、謝家玉の小咄風の「バニシングクリームの思い出（雪花膏的回憶）」、李秀峯の教育色の強い「防空演習」、そして筱竹の、ナンセンス文学風の「理数系の団体結婚（数理婚団記）」「杞人のたわごと（杞人囈語記）」「鍾陽における化学恋愛（鍾陽恋化記）」や、空想性の強い「輪廻する友の印象記（輪回犀印記）」「冷たい死体の寒い夢（冰屍冷夢記）」「ゴムの林の大冒険（橡林歴険記）」など、様々な趣向が見られた。特に対極の作風を為したのは、当時の中国社会や科学技術の現状を背景とし、物語の主人公が同様に理想の中国への「夢」を抱きながらも、虚構性の強い筱竹の作品と、写実性が強く実用性の高い李秀峯の作品だった。本章では、両者の比較分析を行い、これまで見落とされてきた筱竹（高行健）の科学小説の意義を指摘した。

以上の考察を経て、終章では、以下三つの総括を行った。

一）科学小品文の誕生から発展に関して。科学小品文は、『中学生』に携わった人々により成されたが、彼らの経歴を遡れば商務印書館における王雲五の改革があったことを確認できる。科学小品文の発展形としての科学小説「菌児自伝」が連載された『中学生』、あるいは開明書店は、科学小品文揺籃の場として、また、科学小品文のさらなる発展の場として機能した。1930 年に創刊された『中学生』が、当初から多くの理数系の教育材料も提供したことは、そこに集った人々が商務印書館を通して得た共通認識や実務経験を活かした成果と考えられる。『中学生』における理科系読物の実績が礎となり、1934 年の『太白』誌での科学小品文創出につながった。科学小品文誕生の遠因には、商務印書館における王雲五の改革があると言える。そして、『太白』で打ち出された科学小品文は、脳炎の後遺症のために科学者として挫折を味わい、無名の科学普及読物従事者となった高士其に、科学普及読物作家として再起する道を開いた。

二）顧均正が求めていた SF について。顧均正は、『在北極底下』序文において、ウェルズの *The Shape of Things to Come* に言及し、「予言の正確さは豊かな想像と科学的思考による」と評価した。顧均正が求めていた SF は、単に科学的に正しい作品ではなく、豊かな想像性を帯びたウェルズ風の作品だった。しかしやはり、ヴェルヌの作品のように科学的に正しいことを求めて、ヴェルヌがあちこちから関連知識を引用したのと同様に、翻訳の過程で関連知識を引用し、多くの注や補足説明を加えた。ヴェルヌの作品は、編集者エッツェルとの契約によって、主に児童の読物として商業的に成功をおさめたが、その一方で、教育的配慮のために、想像力に歯止めがかけられていたと見る研究がある。顧均正の SF 創作（翻訳）にも、ヴェルヌと同様の、青少年を読者対照にした事情がうかがわれる。顧均正は、ウェルズの作品のような、現実を越える想像性を求めつつも、その飛躍を批判し、科学技術の知識で埋めて、科学的整合性をとることにこだわった。その結果、たくさんの注や補足説明が付されることになったのである。中国における顧均正の SF に対する評価がヴェルヌ風であることを暗に含んでいる点を考慮し、また中国におけるヴェルヌ風／ウェルズ風

をめぐる言説やヴェルヌとウェルズの作風の相違に関する欧米の研究を整理すると、顧均正の作品は「ウェルズ派から出発したヴェルヌ派」といえる。

三）1930 年代の中国の科学小説が、大衆の科学啓蒙という清末期からの科学小説観の伝統を引き継ぎながら、ソ連の文芸理論を受容した戦闘的な科学小品文を発展させた結果、あるいは米国のパルプ・マガジン SF を受容した結果、多様化していたこと。

高士其の「菌児自伝」が、ヴェルヌの作品のように主人公が旅をして「エキゾチックな科学の教科書からかいま見えるような空想的な空間内での《内挿（インターポレーション）》」を行った作品であったとするなら、顧均正の作品は、既知の科学知識をもとに外挿を行ったウェルズ風の作品を受容しつつ、読者の作品解釈を助けるために、あるいは空想の飛躍を埋めるために、科学技術の補足説明を付け加えた作品だった。1930 年代の雑然とした科学小説観、または SF 観は、『科学世界』に掲載された、様々な趣向の科学小説にも見て取れる。